

遊牧民のテントに別れを告げた私は街を目指して徒歩で帰った。車でもそう遠くない印象だったが、道路を外れ草原を横切るようにして歩くと思いの外すぐに街外れの住宅街まで辿り着き、照りつける日差しが暑くて堪らないのを除けば然程の苦勞なく街の中心まで戻ることが出来た。

朝から何も食べていなかったのも、お腹が空いてフラフラだ。飲食店がある通りまで来ると最初に見つけた店に飛び込んだ。店は空いていてお客は私の他に学生のように見える若い青年が二人だけだった。頼んだ汁麺を待っていると、隣のテーブルで向かいに座っていた青年が「日本人ですか？」と話しかけてきた。とてもハンサムな若者だ。チベット人といえば一般的には穏やかな丸顔の、一昔前の日本人のような顔立ちのイメージがあるが、このカム地方の男達は彫りが深く顔立ちの整ったキリっとした男前が多い。青年の涼やかな眼差しには、太陽の照りつける草原を歩いてきた疲れが癒される思いだったが、この時は彼等と話しながらも見る事が出来なかった鳥葬の事が気になって仕方なかった。見知らぬハンサム青年との話題としては如何なものかとも思えたが、さりげなく鳥葬について尋ねてみると、快く受け答えしてくれる青年の話では葬儀は必ずしも早朝に行われる訳ではなく昼過ぎから始まる事もあるのだという。

あれ程「今日だ」と言いきっていた運転手の言葉を思うと、それでは昨日出あった人達の葬儀も今日の午後に行われるのだろうか？とも思えてくる。先に食事を終えていた青年達が店を出て行ってしまうと、私は一人で汁麺を食べながら何となく釈然としない思いだった。

食事を終えて店を出た私はまだ青年の言葉が心に引っかかっていたが、汗を流して歩いてきた道を再び引き返す気持ちにはなれず、通り沿いの洋服屋などをひやかしながら宿泊している宿に向かって歩き始めた。

街で一番整備の進んでいる地区と思われる辺りの道路脇には、ガラスのショーウィンドーを構え今時風な洋服を扱うお洒落な店も数軒あり、まるで時代を飛び越えて別世界に紛れ込んでしまったような理塘の街にも、やはり近代化の波が押し寄せている事を感じさせる。

思えば今回先に訪れていた康定でも、三年前には全く見られなかったそんな店が沢山軒を連ねていた事に驚きを感じたのだった。旅行者の勝手な感傷だとは判っているが、下界から隔絶された天空の楽園のように思っていた理塘も、あと数年後には確実にこの様な店が立ち並ぶ普通の街に変貌を遂げていくのだろうと思うと悲しい気分だっ

た。

自分の泊まっている宿に帰つた私は、遊牧民のテントを訪れた興奮の後の虚脱感と、見る事が出来なかった鳥葬の落胆とで少し気が抜けてしまった。部屋のベッドの上にドサッと横になり天井を眺めながら考える。もし、私にもっとたくさん時間があるのなら、このまま鳥葬が行われるのを何日でも待ち、気の済むまで理塘に留まっている事もできるだろう。だが旅の始めに成都で延長した一ヶ月の旅行ビザの期限は一日一日と迫っていた。それに加えて手持ちの中国元もジワジワと残り少なくなっている。この旅を終え成都に戻るまでに日本円を追加両替できる機会はないだろう。理塘を出て康定に戻っても、私にはまだ成都に向かう前にどうしても訪れておきたい土地が残っていた。もう残り少ない時間の中で、旅はあとどれくらい続けられるのか・・・その事を思うと気持ちの中に焦りが生まれていた。然程大きくもない理塘の街はこの2日間で何度も歩き回っていたし、鳥葬の事を除けばこれ以上この街にとどまっても何をして過したら良いのか思いつかなかった。

「明日理塘を出よう。」グズグズと思い悩んでいるのが面倒になった私は心を決めた。既に何度も足を運んでいるバスターミナルに向かい、窓口で明朝発の康定行きの切符が欲しいとサービス員に告げた。ところがサービス員の答えは、明日の切符は既に完売だと言うのだ。予想外の事にショックを隠せない私が、それでは明後日の切符を購入したいと申し出ると、切符は前日にしか発売しないので明日出直して来いという話だ。迷った挙句に出発を決意してバスターミナルまでやってきた私の落胆は大きかった。出発を心に決めた時点で、滞在の意味が失われたように思っていた街で、残り少ない貴重な旅の一日を無駄にしなければならない事が心を重くした。

まず、今日をこれからをどう過ごそう・・・特に行くあても無い私の頭の中でしきりに青年の言葉が思い返される。先ほど歩いてきた感覚では鳥葬場はそう遠くない。散歩のつもりで再び訪れるのも悪くないと思えた。街の中で特にやることも思いつかない私の足は、結局再び鳥葬場を目指して歩き出していた。

これまで毎回タクシーで通り過ぎていた道を徒歩で歩いてみたのは悪くなかった。先ほどは疲れと空腹であまり楽しむ余裕が無かった道のりが、改めてのんびり歩いてみると、民家の様子やそこで暮らす人々の姿がゆっくり眺められて新鮮だった。

街外れに土を盛り上げて小高い塚になっている場所があ

り、その上には仏塔が立てられていた。そこに登るとこれまで歩いてきた理塘の街並が一望できた。反対側に目を向ければ鳥葬場の方まで広がる草原が見渡せる。

そこから眺められる鳥葬場には人の姿は無く、やはり何事も起こっていなかった。特に期待もしていなかった私は然程に失望する事も無く、暫しの間そこに留まりいつものように「もし自分がこの街の住人だったら・・・」という空想に浸った。

私にとって特別な世界に思えるこの街でも、そこに暮らす事が日常である人達がいる。そんな当たり前の事が不思議に思われる。せっかく此処まで来たのだからもう一度あの場所に行ってみようと再び鳥葬場に向かって歩き始めたところで、三人の子供が私の後を追ってきた。見ればまだ幼い子供達なのに生意気なしぐさで煙草を吸いながら歩いている。

「何処に行くの？」

一番年長と思われる男の子が声をかけて来た。

「あそこに行くの」

鳥葬場を指差して見せると

「あそこへ行ってはいけないよ」

と男の子は言った。

「何で？」

と問いかける私に

「だってあそこは死人(しびと)の場所だから」

と男の子は答えた。

「大丈夫よ。一緒に行きましょう」

と私が誘うと、外国人が珍しいのが、遊び相手が欲しかったのか少年達も私と一緒に歩きだした。年齢を尋ねると一番年長の子が10歳であとの二人は7歳と8歳だという。

「ダメじゃない。子供なのに煙草なんか吸って」

と私がたしなめると、子供達は少し恥ずかしそうに笑顔を浮かべて持っていた煙草を地面に捨てた。生意気そうに見えたが意外に素直で可愛らしい。いよいよ鳥葬場まで近づくと子供達はちょっぴり緊張しているようだった。

「大丈夫？怖くないの？」

とおっかなびっくり尋ねてくる彼等に笑いながら、

「昼間だからお化けなんて出ないわよ」

と私は笑って答えながら先に立ってずんずん歩いた。

鳥葬場の丘の麓には、コンクリートの小さな建物が一つ建っていた。一見、日本の公衆トイレのような感じの建物だ。昨日運転手と訪れた時にあれは何かと尋ねると、葬儀の時に雨が降っていたりした場合、遺族がそこで葬儀が終わるのを待つのだという話だった。

「あそこに行って見ましょうよ」

私は前日もそこに立ち寄っていたので、中に何も無いのは知っていたのだが、何となくもう一度その場所の様子を確かめたくて建物に向かった。すると私達が建物の前に近づいたその時、バーン!!!・・・と、誰もいないはずの建物の中から何かを激しく打ち付けるような音が響いてきてギョっとした。只でさえビクビクしていた子供達は驚きと恐怖で身体を硬直させ顔を引きつらせている。見れば建物の中に取り付けられていた木製のドアが風に煽られて開いていた。

「大丈夫、ドアが風に吹かれて開いただけだよ」

私が子供達を諭し、4人が更に建物に近づいたその瞬間、バーン!!!更に大きな音を立てドアが壁に打ち付けられた。空気が凍りついた次の瞬間、うわ～～～っ!!!子供達は声を上げながら一目散に逃げ出した。先頭に立っていた私は逃げ遅れ、「きゃあ～～～!!待ってよお～～!!」と声を上げると一番年長の子が私を振り返り、足は駆け足のままバタバタさせながらもその場に立ち止まって、後ろ手に私の方に手を伸ばすと「早く!早くっ!!」と叫び声を上げた。

私は必死に男の子に駆け寄ると彼の手を握り、二人で手を繋いだまま前を駆けて行く子供達の後を追って一心にその場から離れようと走った。

子供達と足をもつれさせながら走って、走って、息が切れるまで走ったところで、一同は草原に崩れ落ち、ハアハアと胸を押えていたのが納まると自然にみんな笑い出してしまった。

「ああ～～怖かったねえ～」皆と口々に言いながら、あれ程お化けは怖くないと言い切っていた自分が、その時は本当に焦ってしまったのが可笑しかった。それにしてもあの音は何だったんだろう。ドアが風に煽られただけとは判っていても、その時はドアを壁に叩き付ける程の強い風など吹いていなかった。

日頃迷信やオカルトの類には興味無い私だが、その時は本当に目に見えない何かが「ここに来てはダメだ!」と怒っているように感じられてしまったのだ。怖くないはずの私さえ一瞬恐怖を感じた位なのだから、元々ビクビクしていた子供達はどれほど怖かったのだろう。それにしても・・・そんな状況で私を気遣い、手を差し伸べて待ってくれた男の子にはちょっぴり感動してしまった。やっぱりカムパの男は子供でも男らしくてカッコイイ。年長の子の肩を抱き、彼にお礼を言いながら他の二人に

「あんた達は自分ばかり逃げて酷いわ!」

とからかうと、残された二人がモジモジしながら、

「だって怖かったんだもん・・・」

とバツが悪そうにしているのが可愛らしい。

すっかり仲良しになった私達は草原をそぞろ歩きながら遊んだ。一人の子が草原に咲いている可愛い花を摘んで渡してくれる。相手がいくつだろうと男性に花をプレゼントされるのは嬉しいものだ。

「うわ あ～！ありがとう！！」と受け取り、「日本まで持って帰るネ」と本に挟んで押し花にして見せると他の二人が僕も、僕もと花を取って来てくれる。まるで人気者の小学校の先生みたいにモテモテだ。お礼にみんなに折り紙を折ってあげると、子供達は代わりに石を削って作ったペンダントヘッドのような物をくれた。まるで古代の古墳から出土したアクセサリーみたいだ。「これどうしたの？」と聞くと、拾った石を自分達で研いで作ったのだという。何処のお土産物屋で売られている物より素敵なプレゼントがとても嬉しかった。

それにしても子供に縁のある日だ。思えば朝からずっと子供達と遊んで過した一日だった。バスのチケットが買えなかった事で一瞬沈んだ気分になってしまったのが嘘みたいに、やっぱり理塘は最高だあ～って気持ちになっていた。これまでも何度も感じた事だが、やはり旅とは出会いなのだ。どれだけ素敵な出会いがあったかがその旅がどれだけ良いものになるかを決めるのだと思う。土地の人と気持ちの通じる触れ合いがあればあるだけ、その土地が好きになっていく。

子供達の家がある住宅街まで戻ると、走り回って遊ぶですっかり喉が渇いてしまった私はジュースを飲んで喉を潤し、子供達には楽しい時間を過ごさせて貰ったお礼にアイスをご馳走してお別れした。

宿に戻ると出直して再び温泉に行った。標高の高い理塘の気候は湿度が低く乾燥していて、毎日お風呂に入らなくては過せないほど不快でもない。中国元の残金を気にしながらやり繰りしている私が、宿泊代と同じ金額のタクシー代を使って温泉に行くのは贅沢だと思うが、この幸せだけは手放したくない。

いい気分温泉から戻ってきて宿に入ろうとしたところで、中から出てきた中年の男性にすれ違いざま声をかけられた。

「あんた日本人？一緒に飯喰いに行きまへんか？」

突然の関西弁に驚いて顔を上げると、おじさんの後ろにはもう一人若い男性が立っていた。鍾乳洞の岩山に行く前に私が誘おうとして声をかけそびれた青年だ。日本語の会話に飢えていた私は勿論喜んで仲間に入れてもらった。青年の知ってる店に案内してもらい、お奨めの美味しい麺を食べながらそれぞれの旅の話に花を咲かせる。私が岩山に行くのに誘いそびれた話をすると、彼の方では私に気付いていなかったらしく、それは是非行きた

かったと残念がっていた。残念なのは私も一緒だ。昨日の岩山詣出に仲間が増えていたら、きっと楽しかった事だろう。この関西おじさんの様に何の躊躇もなく声をかければ良かったのかと、ちょっと後悔もしたが、昨日のうちに彼と行動を共にしていたら、きっとその後の展開も大きく変わっていただろう。今日が特別に楽しく過せた事を思えば、それはそれで良かったのかもしれない。

成都を出て以来久しぶりに同じ感覚を共有できる日本人同士で、思い切り日本語の会話ができるのはとても楽しかった。それは、それぞれが一人旅を続けていた関西おじさんと青年の方でも同じだったようで、軽い軽食を扱っていたその店が夕方で閉店すると、このまま本格的な夕食になだれ込もうと店を変え、食事が済んでも話は弾み続けた。夏休みを利用した長期旅行をしているという学生の彼はともかく、この関西のおじさんは面白い人だった。

特に中国が好きで訳でも無く、中国語なんて全く話せないという中年のおじさんが、こんな奥地まで一人で来る事自体が珍しく思えたが、その風貌もかなりユニークだ。小太りでメガネをかけ、短いズボンに女性用のストッキングをハサミで切った物を太股までの長靴下として履いている。私達がそれを指摘すると「これがあつたかくて、重宝なんですわ～！」と熱弁していた。関西弁特有の軽妙な語り口で、これまで訪れた国の現地女性との色っぽいエピソードなども面白可笑しく語るおじさんに私と青年は大笑いた。

青年が話してくれた、宿で相部屋になっているフランス人旅行者の話も凄かった。私は共同の洗面所などで顔を合わせ、彼が発散しているオーラに只者ではないエネルギーを感じていたが、その彼は自転車で中国を旅していて、この理塘までも自力で自転車をこいでやって来たのだという。何度も繰り返してしまうが理塘は標高が4千メートルを越える高地にある街だ。街と街の距離は遠く、何処までも広がる大草原と辺り一面瓦礫しかない砂漠の様な土地を、車でさえ長い長い道のりを走り続け、酸素が薄い為に車のエンジンさえ悲鳴を上げそうな峠を越えなければ辿り着く事はできない。その日の天候により気温の寒暖の差は激しく、この季節でも小雪の舞う日さえある。そんな場所を自転車でやって来るには人間離れた鉄人の肉体が無ければなし得ない事だ。

面白い土地には面白い人間が集まって来る。そんな旅人達の話の聞けるのも僻地と呼ばれる土地に旅する楽しみの一つだ。いつまでも尽きない旅の話に3日目の理塘の夜は更けていった。
(続く)